

原 著

神話の解体もしくは1755年の文化闘争 ——『カルトゥーシュとマンドランの対話』を巡って——

蔵 持 不三也*

要 旨

本稿は、近代フランスにおける強大な密輸・密売人の首領で、「総徴税請負人たち」の恐るべき敵でもあったルイ・マンドラン（1725-55）のアンチ＝ヒーロー神話を論じたものである。マンドランは、ローヌ河沿いの南仏ヴァランスであえなく車刑で処刑されているが、民衆的想像力によって構築されたこの民衆神話は、1721年にパリでやはり車刑に処された大盗賊カルトゥーシュの英雄神話同様、1755年から56年にかけて産み出された数多くの著作や歌謡、版画などによって広範に普及していった。だが、この神話は、アンチ＝ヒーロー化されたマンドラン人気を解体し、彼を単なる残酷な盗賊に貶めるため、新たな神話を構築しようとする、体制側のさまざまな告発文学の反撃に遭うようになる。こうしてマンドラン神話を巡る民衆文化とエリート文化との闘いが始まる……。

はじめに

フランス最古の公共図書館であるパリのマザリヌ図書館に、1755年に著された13葉からなる小冊子がある。題して『カルトゥーシュとマンドランの対話』⁽¹⁾。ジャン＝ドミニク・カルトゥーシュ（Jean-Dominique Cartouche）とは、国中がいわゆる「ロー・システム」でバブル経済に酔いしれていた摂政時代の1719年頃、20代半ばで手下数百を数える大盗賊団を組織し、パリを中心に殺人と窃盗をほしきままにして、1721年11月、命運つきてグレーヴ広場（現市庁舎前広場）で車刑に処された天才的極悪人。ルイ・マンドラン（Louis Mandrin）とは、サヴォワ公国を中心として、民衆の怨嗟的になっていた総徴税請負人⁽²⁾やその傭兵たちを攻撃し、時には賄金づくりにも手を出していたと

される密輸・密売組織の首領である。

この両者は生きていた時期も活動の舞台も異なる。だが、いずれも車刑に処された犯罪者でありながら、民衆から死後、いや、すでにその生前から絶大な人気を博し、ついには英雄視されるようになったという点で似通っている。ナポレオンが壮大な建造物や造形表現によって「偉業」を可視化し、自らを国家的英雄に押し上げたのと異なり⁽³⁾、彼らは犯罪者としての短い生涯を送りながら、すぐれて民衆的な英雄となった。なぜか。本稿はそこにこだわる。つまり、近世フランスにおけるイマジネールのメカニズムを、とくにマンドランという、カルトゥーシュと好一対をなすもうひとりのアンチ・ヒーローの存在とその神話化を巡って検討するものである。

まず、問題の小冊子からみていこう。出会い

*早稲田大学人間科学部・人間科学研究科

の舞台は地獄。先に車刑に処されたカルトウーシュが、1755年にフランス南部のヴァランスで公開処刑されたマンドランを待ち受ける、という想定である。マンドランの処刑年に発表されたこの小冊子が、はたしてだれの手になるものかは分からない。分かるのはただ、カルトウーシュの場合と同様に、マンドランの偉業もまた、死後ただちにこうしたテキストが編まれるほど人口に深く膾炙していたことと、小冊子が、当時フランスの出版文化の一翼を担っていたトロワの書肆から、安価な行商本である青本叢書の1点として刊行された、ということだけである。いささか長い引用となるが、貴重な一次史料であり、わが国初の紹介でもある。煩を厭わず、あえて全文を訳出しておこう。

Ⅰ.『カルトウーシュとマンドランの対話』

カルトウーシュ：ボンジュール、ムッシュー・マンドラン。この冥界で君を丸2年(?)待ってたぞ。だけど、何か心配事でもあるのか？
それとも、計画でも失敗したのか？

マンドラン：上界にいる馬鹿どもめが、俺の手足を散々殴りつけて血みどろにしやがったんだ。連中は腿まで砕いた。うんざりするほどだ。
カルトウーシュ：腰に痛みはないか？ 少しだけ痣ができていようだけだ。

マンドラン：馬車がひどく揺れたせいだな。何しろ車輪1本に乗って*1旅をしてきたのだから。車輪のハブに背中全体が擦られた。

カルトウーシュ：なるほど。連中は君を私と同じ「幸運の車輪」の上に寝かせた。ま、そこに掛けたまえ。仲間になろうや。

マンドラン：仲間だと？ いったいどんな資格でだ？

カルトウーシュ：ならず者としてさ。

マンドラン：失せやがれ、ぶしつけな亡霊め。俺の怒りを恐れろ。

カルトウーシュ：抑えて、抑えて、ムッシュー・マンドラン。分かったよ。われわれはボーヌ

やグルナン*2にいるわけじゃない。どうやら君は、私が総徴税請負人の傭兵だと思こんでいるようだが、分かってくれよ、私もまた、君と同じように見事な車輪を1本もっていることを。そして、いいかい、君と話しているのは、ほかでもない大カルトウーシュ様だということ。

マンドラン：あー、哀れなペテン師だ。お前は盗みや殺人でしか俺と張り合えない。それでもお前は、俺と張り合いたいのか？

カルトウーシュ：高名なマンドランがカルトウーシュの挑戦を拒んだ！ この気高い盗賊の傲慢さはどこから来るのか？

マンドラン：ペテン師より盗賊のほうがましだ。

カルトウーシュ：馬鹿を言え、ムッシュー・マンドラン。間違いだ。趣味人の裁判では、いつも怖ろしい暴力より巧みな繊細さが勝つことになっているんだ。一方は、われわれを愚か者たちから区別する精神の輝き、もう一方は、君を闘技者や肉体労働者と一緒くたにする腕力にのみ由来する。

マンドラン：だったら、お前流で言えば、アレクサンドロス大王は何者となるんだ？

カルトウーシュ：幸運な盗賊さ。ダリウス*3がアルベラの戦場で大王を捕虜にしていたなら、その場で車刑にしたはずの男だ。君のアレクサンドロスは、いったい君にどんな記憶を残している？ 彼は戦う術をもたなかったペルシア人の喉をかつ切った。防御のできなかった町をいくつも攻め落としてもいる。これが大王を声高に讃える理由なんだ。この愚かな民たちのご立派な勝利者は、マケドニアに留まっていたなら、馬鹿なことなどしでかさなかった。大王はベルゲン＝オブ＝ゾーム*4に姿を見せたりは決してなかったはずだ。そう断言してもいい。

マンドラン：俺はそこに行くことなど恐れちゃいない。ボーヌがその証拠だ。

カルトウーシュ：面白い比較だな。

マンドラン：それが的を得ていない比較だとは

分かっている。だけど、俺のポーヌ遠征の利点をすべて知っているのか、お前は。人から聞いたかもしれないが、この町は城壁で囲まれており、住民たちは町を防ぐ術を心得ているんだ。しかも、戦いとなれば、ブルゴーニュ人は情け容赦もない。しかし、俺の手下たちは、真昼間、溝を掘ったり、砲撃を受けたりすることなく、町の武装を解除したんだ。そこで俺は、先頭に立って町に押し入り、火を放って城壁を一掃した。それから市門を打ち壊し、町を奪取して、法を定めた。

カルトゥーシュ：何と恐ろしい征服者だ！ まさにこれこそ手短な攻囲戦というもの。

マンドラン：いや、これはまだ俺の偉業の序の口だ。俺はさらにポン＝ド＝クレを破壊し、ロードやマンド、ビヨード、ナンチュア、ロアンヌ、シャルリュ、マルサル、ティエール、アンペール、ランゴーニュ、クリュニー^{*5}などを恐怖に陥れ、さらに無数の町では今もなお俺の噂話が聞かれるほどだ。

カルトゥーシュ：皆が君の話をしている・・・。君にとって、それはさぞかし嬉しいことなんだろうな。

マンドラン：オータン^{*6}が俺のことを忘れて久しいとは思えない。そこは俺が単なる征服者以上のことを行った土地だからな。

カルトゥーシュ：じゃあ、君はこれらの地をすべて征服したかったとでも？

マンドラン：いや、それらを守るのは面白くなかった。だから税金を取り立てたのだ。総徴税請負人の手下共に俺の密売稼業を手伝わせて金を巻き上げ、払わない連中は殺した。

カルトゥーシュ：そうか、ムッシュー征服者、君は密売人だったのか。しかし、この上、贋金作りにでもなったら最悪だな。

マンドラン：俺たちは何が豪華なものかを知っていた。そして、それを完全に手に入れた。

カルトゥーシュ：いやはや、上界の連中が君の手足を砕いたとしても仕方がない。ムッシュー・マンドラン、君はあまりにも悪党す

ぎる。しかも、贋金作りで密売人、加えて盗賊。この肩書きひとつだけでも、君に会う価値がある。

マンドラン：俺の栄光は才能じゃなく、方法によるんだ。この方法を、俺は手下たちに教えることができた。

カルトゥーシュ：彼らはそれを見事にやってのけた。だけど君は哀れな理論家だ。徒党を組み、その先頭に立ったまではよかったけれど、2年後に骨を砕かれてしまった。いいかい、こうした君の偉業をすべてまとめたところで、私の活動のひとつとすら張り合えない。

マンドラン：でたらめを言うな。こっちはとうにお見通しだ。

カルトゥーシュ：ブルトンヴィリエ館^{*7}で私の名前が不滅なものとなっているという事実まで、君に話そうとは思わない。私は、自分のことを話さなければ、その来歴を教えられないような輩とは違う。多くの口が、私抜きで私の来歴を語っているんだ。たしかに君は地方の小さな舞台に登場している。だけど、すぐに忘れ去られてしまうだろう。それに較べて、私は首都の舞台に上っており、だれも私を忘れたりはいしない。

マンドラン：パイプの時代が続くかぎり、鼻がその香りを愉しむかぎり、すべての総徴税請負人から、俺の歴史を語る連中が出てくるはずだ。

カルトゥーシュ：ポン＝ヌフ橋がセーヌの流れを眺めるかぎり、人が自分の財布を守りたいと思うかぎり、カルトゥーシュの名前は首都と地方に知れ渡るはずだ。

マンドラン：俺の名は雇われ人たちの記憶の中に、血文字で書き留められている。

カルトゥーシュ：しなやかさと鋭敏さが、私の名を人々の記憶に刻んでいる。

マンドラン：俺の偉業はなお6つの地方全体に鳴り響いているぞ。

カルトゥーシュ：フランスは国境を越えて私の偉業の証人となっている。

マンドラン：俺は40人の役人を血祭りに上げた。
カルトゥーシュ：私は4万以上の財布を切り裂いた。

マンドラン：俺は300人以上の部隊を指揮した。
カルトゥーシュ：私は1万もの人間を配下に置き、意のままに動かした。

マンドラン：俺の麾下には、実戦の強者しかいなかった。

カルトゥーシュ：私は手先の器用な人間を、町や村や店で、さらに王侯貴族をカモに指揮していた。

マンドラン：カルトゥーシュ親分、あんたが手下にそれほどまで尽くされていたなら、なぜグレーヴ広場（現パリ市庁舎前広場）の処刑台に上る代わりに、それを打ち壊させなかったのか？

カルトゥーシュ：最初、私はそれが単なる冗談だと思っていた。事態はどうせ変わるのだろうとみて、何の抵抗もせずにすんで処刑台に上ったんだ。だけど、不幸なことに、裁判官や治安警察はあまりにも心配しすぎていた。そして、白状するが、芝居は私にとって不幸な結末となった。偉大な征服者で高名な町の奪取人たる君の方は、いったいどうして捕まったのかね？

マンドラン：俺たちは、この渡世を営むかぎり、裏切りから逃れることができない。俺が信頼していた哀れな男も、俺と一緒にいるのが嫌になり、俺が寝るのを待って、官憲に引き渡しやがった。

カルトゥーシュ：私は眠る大將が嫌いだ。

マンドラン：俺ひとりに30人以上が飛びかかってきた。ただ、その時、自分が寝ていたかどうかは、今でも分らない。俺をヴァランス^{※8}に連行した際、連中はこの俺さまを縛りつけ、それから・・・。

カルトゥーシュ：続けて、続けて。有名な英雄なんだろう、君は。それから連中はマンドラン將軍を独房に押し込んだ。そこから將軍は被告人席に上り、次いで処刑台に上り、最後

に車輪に縛りつけられた。そして、このほら吹き（の遺骸）は取り除かれ、地中深く私のはるか下の方に置かれた。

マンドラン：あんたの下・・・？ いや、俺はここでは第一人者だと思っている。この冥界では、車刑に処されて俺以上に有名な奴などいやしない。

カルトゥーシュ：いや、第一人者の地位は長い間この私が守っている。だれにもその座を譲ったりはしない。

マンドラン：いずれ俺があんとあんたの一味を凌ぐ。あるいは上界で役人を扱ったと同じように、詐欺師を扱ってやる。

口論は次第に激しさを増していった。そのめめ事を知った冥府の神プルトンは、巾着切り（カルトゥーシュ）と町の奪取者（マンドラン）とを自分の法廷に召喚した。二人は出頭した。「わが帝国でのこの騒ぎは何事か」。プルトンは彼らに糺した。「大胆不敵なならず者であるお前たちは、人間たちの憎悪的であり、冥界の恐怖でもある。そして、大胆にも声を荒げる。罪と刑罰とが本性の卑しさを表している哀れな盗賊たちよ、永遠の沈黙の中に帰り、自らの罪の重さを恥じるのだ。お前たちは、多くの悪行からいったい何を成果として引き出し、どんな利を得たというのか？ たとえばカルトゥーシュよ、お前は夥しい盗みによって、長い間フランスを驚愕せしめた。殺人によって怯えさせもした。自分のものではない財産も蓄えた。いったいお前は、そんな財産で愉しんだり、裁判から逃れる秘密を見つけたのか。一方、マンドランよ、お前は徴税請負制の廃止を誓い、それを短刀で血祭りにあげた。その首尾はどうだった？ 勝利の美酒を味わったか？ 栄華へと至る大胆不敵な所業を繰り返しながら、自分が不滅だと信じていたのか？ お前が精神を育んだこの立派な^{ネマウス}空想はどうなった？ お前の理性を酔わせるようなこうした興奮や計画は、煙のようにほんの一瞬で消えてしまった。にもかかわらず、牢獄

に繋がれながら、なおも自分が偉大だという夢想から醒めていないのか？ お前が武力によって恐怖を吹き込んだと信じている者たちは、お前を死刑執行人に引き渡した裁判官になっているのではないか？ その罪を罰せられずにいるような罪人などいた試しはない。この二人の事例は、なおも生きながらえ、自分を待ち受ける復讐を避けるべく、無用な努力をしている極悪人たちに何を教えているのか？ それは神（の摂理）が存在し、その目は極悪人たちを覆うヴェールを貫いている、ということである。いかなる巧妙さをもってしても、正義の神の目から密かな犯罪を隠すことなど決してできない。いかなる力も、盗賊たちを処刑台から守ることはできない。

汝カルトゥーシュよ、詐欺師たちの先頭に立て。汝マンドランよ、盗賊たちの親玉たれ。そして、ともどもに罪人たちに恐怖を引き起こす者となれ」。

こうして二人がプルトンに指示された地位につくようになると、冥界の女王プロセルピナがマンドランに近づき、地上で何が起きているかを尋ねた。「ひとつを除いて、新しいことなど何もありません」。マンドランは答えた。「カブリオレが流行っていて、パリ中の恐怖となっていることです」。「そう」、プロセルピナが言う。「そのカブリオレはどのようなものなの？」。「軽量の馬車で、車輪は2本、引馬は1頭だけです、マダム」。マンドランが続ける。「屋根がなく、乗り手が御者の役目を担います。そのため、これに乗る者は女曲馬師風の帽子、つまり大きな巻き貝状のフードをかぶり、灰色の手袋をし、袖を束ねて狭くした服をまとい、さらに手に鞭を持たなければなりません。際限なく変化を重ねて完成されたものになったカブリオレに、大通りの知者たちは上品さを付け加えるのに成功したのです。それ以来、巻き毛といい、かぶり物といい、身繕いといい、鬘といい、すべてがカブリオレ趣味となっている。若い主人などは

昼夜を問わず、カブリオレを走らせていますよ。商人の息子ですら、カブリオレを欲しがっている。間もなく、全住民がカブリオレをもつことになるでしょう。これが、マダム、パリの高潔な士たちが真剣に氣遣っていることです」。

「私もカブリオレを一台欲しいわ」。プロセルピナが言う。「フランス人をあまり真似しすぎてはいけないけれど、あの人たちは趣味と同じだけ知恵ももっています。だから、急いでカブリオレを。カブリオレで散歩ができたなら、どんなに楽しいことでしょう」。こうしてカブリオレの製造職人が急ぎ連れてこられた。同日、梶棒が作られ、カルトゥーシュとマンドランもそれぞれ自分の車輪を提供した。これが、地獄におけるカブリオレ流行の始まりとなる。以来、プロセルピナはカブリオレに夢中となり、われらフランス人が大通りで言うように、エリュシ^{リュシ}オンの園を愛車でところ狭しと駆け回っている。（括弧内蔵持）

* 1 車刑に遭ったことを指す。

* 2 ボーヌとグルナン（正確にはギュナン）は共にブルーゴーニュの地名。マンドラン一味がボーヌを襲ったのは1754年12月18日。一味は城門を守る民兵たちを殺傷して市内に侵入し、町長ピエール・ジレを捕らえ、彼らへの寄付金として、塩倉およびタバコ公売所の収税人に2万リーヴルを持参させる。マンドランは兵士たちの横暴を訴え出た老女に120リーヴル与え、感涙の接吻を受けているが、その「下賜」はこの寄付金からのものだった。2日後、100人あまりの一味は、ボーヌの西50キロメートルほどのロマネスク都市オータン近郊の小村ギュナンで、彼らを追ってきた軽騎兵やドイツ騎兵たちと銃撃戦を演じ、仲間9人を失うが、敵の擲弾兵7人、軽騎兵5人、士官2人を斃し、十数人を負傷させている。この戦いは、マンドランにとって最大の修羅場となった。

* 3 グリウス三世のこと。アカイメネス朝ベルシア帝国最後の王（在位前336－前330）。

アルベラは、331年、アレクサンドルがダリウス王を破ったチグリス川上流の最後の戦場。

- * 4 ベルゲン＝オブ＝ゾームは、難攻不落をもって知られていたオランダ南部の中世都市。
- * 5 ポン＝ド＝クレはグルノーブル南郊、ロードはボージュ地方の小村、マンドは南仏ロゼール地方の中心都市、ビヨードは中東部ジュラ地方の山村、ナンチュアはアン地方の町、ロアンヌは中部ロワール地方の小都市、シャルリュウはロアンヌの北東部の町、マルサルは南西部タルン地方の村（アルビ近郊）、ティエールとアンベールはロワール地方の、ランゴーニュはオート＝ロワール地方の町、クリュニーはソーヌ＝エ＝ロワール地方の町で、大修道院で有名。
- * 6 ソーヌ＝エ＝ロワール地方の小都市。ロマネスク様式の修道院で知られる。
- * 7 カルトゥーシュー味が忍び込んだパリの邸館か。
- * 8 南仏ドローム地方の中心都市。ローヌ河沿いに位置する交通の要衝。

2人の極悪人による地獄での埒もない自慢話といえ、それまでである。出てくる数値には、むろんかなりの誇張もある。冥界の神プルトンの裁きも、創造性という点ではさしたるものではけっしてない。目新しさは、話の流れとは無縁の、むしろ唐突に登場するカブリオレにある。当時「現世」で流行っていた、折り畳み式の幌がついた二輪馬車で、話ではプロセルピナの懇望でそれをつくるため、カルトゥーシューとマンドランが地獄まで背負ってきた車輪を用いたとなっている。むろんこれは、2人が地獄まで背負ってきた車輪⁽⁴⁾の車輪である。そのカブリオレが地獄でも流行するようになったとは、いささか興ががちすぎているが、改めて指摘するまでもなく、現世におけるカブリオレの乗客たちは、しばしばカルトゥーシューやマンドランの襲撃対象となった。

だが、この小冊子の1755年という発表時期か

らして、作者の目は明らかにマンドランに向いている。つまり、「英雄」に列せられてすでに久しいカルトゥーシューと互角の自慢話をさせることによって、マンドランの「英雄性」を打ち出そうとしたのではないか。確証はないが、マンドランがしばしば誇らしげに語る総徴税請負人やその傭兵たちへの襲撃は、まさにそうした彼の英雄性を顕在化させる仕掛けと考えられるのだ。では、後世「義賊」の美称を冠せられるようになったマンドランとはいかなる人物だったのか。以下では、マンドラン研究の基本書とされるフランツ・ファンク＝ブレンターノの『盗賊たち』や、千葉治夫の『義賊マンドラン』（註2参照）などを参照しつつ、手短かにみておこう。

マンドランの出生

カルトゥーシューが処刑されて3年後の1725年2月、ルイ・マンドランはフランス中東部ドーフィネ地方のサン＝テティエンヌ＝ド＝サン＝ジョワール（Saint-Etienne-de-Saint-Geoirs、以下サン＝ジョワールとのみ記す）に生まれている。父親は小売り商で、小間物やりキュール、布地、ワインなどを商い、ルイを頭に9人の子供をもうけている。

17歳の時、ルイは他界した父親の家業を継ぐ。折しもオーストリア継承戦争のさなかであったが、商才に恵まれていた彼は、商売を発展させようと、素封家の娘だった母親とともどもグルノーブルの大市などに出かけ、かなりの商いをしていたという。1748年5月、そんな彼に願ってもない僥倖が訪れる。軍隊の兵站を仕切っていた総徴税請負人の委託を受けて、アルルに駐屯していたイタリア遠征軍に、ラバを100頭納入することになったのだ。そのため、軍政と関わりをもっていたリヨンの銀行家から多額の借金をしてラバを取りそろえた。ところが、好事魔多しの喩え通り、5ヶ月後に戦争が終結してしまう。そのため、傭兵の大半が解雇され、ラバも不要となってしまうのだ。やむなくラバを引き取りはしたものの、帰途、流行していた畜

疫に罹ってほとんどのラバが死んでしまう。マンドランはただちに総徴税請負人に損害の補償を申し出るが、所詮は一介の下請け業者。彼の願いは、軽く一蹴されてしまう。こうしてマンドランは破産を余儀なくされ、ここから彼の総徴税請負人に対する憎悪と血生臭い密売稼業が始まることになる。

その直接のきっかけとなったのは、ある噂だった。サヴォワとの国境近く、ギエル川の右岸で、総徴税請負人の目を逃れて食料品を密売する者たちが、ひどく荒稼ぎをしているというのだ。そこでマンドランは、2人の弟を含む同村の若者4人で徒党を組む。史料はないが、商才に長けたマンドランのことである。おそらく隣のプレスやビュゲ地方にまで進出して、密輸・密売に活路を見出したにちがいない。そして1552年、総徴税請負人配下の傭兵たちと闘い、初めて勝利を収める。以来、マンドラン一味は、「マンドラン党 (Mandrins)」と通称されるようになる。この通称は、体制側にとっては危険分子の、地域の住民たちにとっては期待の謂いにほかならなかった。

スー事件

そんなマンドラン一味の存在を、一気に世に広く知らしめたのがスー事件だった。ことのおこりはこうである——。1753年3月29日の民兵⁽⁵⁾徴募抽選日。ロマン市⁽⁶⁾の地方長官補佐の監督下で実施された抽選で、ピエール・ブリソーなる若者は運悪く当たり籤を引いてしまい、逃亡する。それを知った長官補佐は、ピエール・スーなる男に逃亡者の逮捕を命じる。捕まえたら、スー本人の兵役を免除する。それが条件だった。ただちにスーは2人の兄弟や仲間たちと探索にあたった。ブリソーはマンドランを頼ってサン＝ジョワール村に逃げ込んだ。義侠心ゆえか、それとも仲間に加えようとしてか、マンドランは兵役回避者の必死の願いを受け入れ、翌30日、村の近くで追っ手6人と対峙する。数ではひとり劣勢だったが、戦いに慣れたマン

ドランたちのこと、スーを即死させ、その兄弟のひとりにも致命傷を負わせて、勝負はあっけなくついた。

反逆罪にも等しいこの事件の報告を受けた、グルノーブルのドーフィネ高等法院首席検事モワデューは、ただちにマンドランたちの連行命令を出す。しかし、彼らはすでに村を出奔したあとだった。7月21日、同法院は首謀者マンドラン以下3人に対する欠席裁判を行い、車刑の判決を下す。処刑は彼らの人形に対してなされた。マンドランと次弟ピエール、さらに仲間ひとりには贖金づくりの罪も科せられた(ただし、マンドランの贖金づくりは立証できず)。詳細は不明だが、やがてブリソーは捕まって絞首刑となり、その首は、スーの殺害現場に晒されたという。それから間もなく弟も逮捕され、グルノーブルのブルイユ広場(現グルネット広場)で処刑されてしまう。首は生地に運ばれ、村を見下ろす高台に晒された。

マンドランの反撃

このスー事件の顛末は、マンドランの反国家的とまではいえないまでも、少なくとも権力に対する敵愾心や密輸・密売意欲を萎えさせるどころか、逆に一層煽り立てることとなった。事実、彼はサヴォワ公国に拠点を設けて仲間を増やし、本格的な密輸団を組織して、しばしばドーフィネ地方の生地に近い村や町に出没して密売を行い、これを取り締まろうとする総徴税請負人の配下たちを容赦なく殺害した。

たとえば1754年1月、短銃やマスカット砲などで武装し、ラバの背に大量の密売品を積んでロマン近郊のキュルソン村に向かったマンドランと数人の手下は、街道で遭遇した総徴税請負人の傭兵隊と最初の小競り合いを演じている。この小競り合いで、傭兵たちは数人の死傷者を出し、敗走を余儀なくされた。

それから数ヶ月間、一味はドーフィネ各地の大小の村を自由に行き来し、上質なスイス製タバコ、フランネル、インド更紗、モスリンといっ

た密輸品を、村人たちが通常賤う値段より安価で売りさばいた。加えて、マンドランは不要な税金分を自分たちと村人とで折半もした。敵の襲撃を避けるため、村の高台で催された彼らの「臨時市」が、多くの周辺住民を引きつけたことは想像に難くない。ファンク＝ブレンターノは記している。「小ざれいに飾り立てたブチブルや生き生きとした顔の小間使い、大きなリボンつきの白い帽子をかぶったこざっぱりした農婦、さらには城主夫人や淑女たちまでもが、何のためらいもなく僥倖を享受した」⁷⁾。

むろんこうしたマンドランたちの傍若無人な犯罪行為に、地域の治安当局が手をこまねいてわけではない。すでに城代はグルノーブルの高等法院に、一味が毎日のように村に出没と訴えている。この訴えは、地方長官から中央政府にも伝えられた。だが、その返事はといえば、ドーフィネはさまざまな免税特権を享受しており、その免税分で盗賊一味に相対するような手段を講ずべし、というものだった。これに対し、地方長官は、マンドラン一味が民衆を味方に行っているため、掃討がきわめて困難だと抗弁している。

はたして地方長官の必死の抗弁がきいたのか、1733年にフランス初の密輸・密売取締り特別法廷が設けられた、ローヌ河岸ヴァランスの郊外に軍営が設置される。この軍営には、フランス各地からの歩兵部隊に加えて、ドーフィネやラングドックからの竜騎兵も集められた。さらに、サン＝ジョワール村の周辺にも兵が配置された。たかだか十数人たらずの密輸・密売人に対するものとしては、異常なまでに過敏な警戒態勢であった。むろんそれは、マンドラン一味の存在が国家秩序にとってどれほど脅威であったかをつとに物語ると同時に、彼らを支える民衆に対し、国家権力の強大さと反抗の不可能さを見せつける、すぐれて象徴的な意味をも帯びていた。いや、帯びているはずだった。

だが、それで怯むマンドランではなかった。ヴァランスや生地を避けさえすれば、取締りが手薄なことも見抜いていた。事実、1754年6月

8日には、ヴァランスからローヌ川沿いに40キロメートルほど南下したモンテリマ近郊の街道で、武装した取締り隊を攻撃し、敗走させている。6月11日には、中央山地東部ヴィヴァルネ地方のティオルで、兵士募集下士官を取締り傭兵と誤認して銃殺し、さらに6月23日には、中央山地南部の皮なめし業で栄えたミヨ近郊のサン＝ローム＝ド＝タルンで、一味の数人がある傭兵を追跡し、これを匿い、引き渡しを拒んだ土地の妊婦を殺害するという蛮行に及んでみいる。

そして6月30日、マンドランは武装した52人の手下ともども、トゥールーズ北東方ロデスに向かう。アヴェロン河沿いのこの古都は、当時人口数千を数える要塞都市だったが、一味は駐屯軍隊を難なく武装解除してしまう。町に入ったマンドランたちは、タバコの葉を積んだラバ数頭を連れて、ただちに総徴税請負人の代理であるタバコ公売人の家に押しかける。強制的に闇タバコを売りつけるためである。総額約2500リーヴル。公売人に選択の余地はなかった。怯える彼に、マンドランは「ムッシュー・マンドラン」と署名した領収書を発行した。そんなマンドランたちが立ち去ってから、公売人がタバコ袋の重さを量ると、マンドランの申告通りだった。犠牲者が出なかったこともあって、やがてこの話は噂となって人口に膾炙し、マンドランが正直な「密売商法」をするとの評判が一带に広まったともいう。

7月9日、マンドランはサヴォワ（ないしスイス）に引き上げる際、軍隊の目を盗んで郷里の村に立ち寄る。そして、弟ピエールを絞首台に送った元傭兵を捕まえ、幼い子供を抱きながら跪き、許しを乞う彼を子供ともども射殺してしまう。

こうして弟の仇をとった彼は、それからひと月後、再び手下を従えてフランス領に入る。その後の詳細な足取りはいずれ上梓される拙著に譲るが、以上縷々紹介しただけでも、彼の行動がいかなるものだったか理解できる。ファンク＝ブレンターノはそれを次のように総括してい

る。「こうした遠征のあと、マンドランは必ずスイスやサヴォワに舞い戻り、歓迎された。当局自身も好意的な目で彼を眺め、国境の人々からも讃えられた。(・・・) マンドランがじつに見事に組織した交易が、少しずつ発展していくようだけれども願った。それが地域の新しい繁栄につながるといふ、幻想を抱いていたのだ。当時、この地方に入り込んでいたフランス政府の密偵はしたためている。サヴォワを活性化させているのは、ほかならぬ密売人たちである。彼らとともに荒稼ぎをしていないような貴族やブルジョワないし農民など、じつにひとりもない、と。マンドランは国境地帯で物資を補給していた。そのため、新入りを加えて、一味の強化ないし完璧化を行った。こうした戦略が功を奏して、彼の名前は広まり、志願者が各地から馳せ参じた。一方、彼の資産も徐々にかなりのものに膨らんだ。すなわち、1754年末には、それは10万リーヴル、現在の金額で30万フランにまで達したのである。彼はその一部をロシュフォルとモンベルの領主であるショーモン侯に、一部を国境地帯のサヴォワ領ポン＝ド＝ボーヴォワザンに住むサン＝セヴラン侯に与えた」⁽⁸⁾。

マンドランの密輸・密売活動が地域経済の活性化と密接に関連し、だれもがそれに大なり小なり関わっている。マンドラン研究の第一人者だったファンク＝ブレンターノのこの記述は、いささか誇張のすぎる表現と思われる。だが、こうして蓄えた巨額な資金の一部を、本拠地の領主たちに提供していたとの記述を信じれば、おそらくマンドランはまさに地元領主たちから一種の治外法権的な特権を与えられていたに違いない。いや、前述の『対話』の中でカルトゥーシュが言っているように、一種の王国すら築いていたといえるかもしれないのだ。

1755年1月、フランス国境に近いスイス東部のプランジャンに滞在していたヴォルテールは、ザクセン＝ゴータ公爵夫人宛の私信の中で、次のように記している⁽⁹⁾。

フランスを大騒ぎさせているマンドラン一味は、しばらく前の話になりますが、現在われわれが住んでいる城の麓にある小さな町にいました。彼らの隠れ家はスイスでしたが、今ではかかる避難所など無用であり、その首領マンドランは、血気盛んな6000もの手下を従え、(フランス)王国のど真ん中に陣取っております。国王の兵たちですら部隊単位で軍を離れ、彼の旗印のもとに加わるようになっており、このままさらに勝利が続けば、遠からず彼は大きな軍隊の長となるはずともいいます。3ヶ月ほど前には一介の盗賊にすぎなかった男が、今では征服者にまでなっている。そして、フランス国王の一部の都市に寄付金を納めさせ、その戦利品から配下の兵たちに、国王がその兵たちに支払うよりはるかに多額の報酬を与えているのです。民衆はそんな彼の味方をしています。総徴税請負人たちに辟易しているからです。もしもこうした話が真実なら、彼の盗賊行為は華々しいものとなり、次々と後継者が出現するでしょう。

だが、カルトゥーシュの「国家内国家」同様、マンドランの栄華もさほど長続きはしなかった。身の丈をはるかに越える成功ゆえに、彼はそれまでの自分を築き上げてきた大胆な細心さを忘れてしまった。そこに治安当局のつけ入る隙が生まれた。

マンドランの逮捕

最初、時の政府からマンドラン逮捕の特命を受けたのは、ドーフィネ地方の総徴税請負人ルルー・ド・ラモットである。地方長官補佐でもあった彼は、1755年4月8日夜、フランスとサヴォワとを隔てるギエール川を挟んで、土地の有力な密売人のひとりピエモンテと停戦交渉を試みる。ピエモンテとともにマンドランを追いつめるためである。だが、暗闇の中から放たれた銃弾を受けて、ラモットは間もなく落命してしまう。犯人はおそらくマンドランの手下と思

われるが、真相は文字通り藪の中である。

それから1ヶ月経った5月11日、新たにランドル義勇軍指揮官のマガロン・ド・ラ・モルリエールが特命を受ける。グルノーブル生まれのこの歴戦の強者は、農民の格好をした兵500や密輸・密売取締り傭兵隊を引き連れて、マンドラン一味があらかた出かけ、首領と手下3人だけが残った、サヴォワ公国内のロシュフォール城を奇襲する。不意をつかれた手下たちは、慌てて広大な城内に隠れるが、むしろそれは悪あがきにすぎなかった。やがて奇襲部隊は、逃げまどう下女たちを打擲し、そのひとりにマンドランの居場所を白状させ、ついに寝室にいた彼を捕まえる。『対話』の中でカルトゥーシュが言う「眠る大将」とは、彼自身がそうであったように、寝込みを襲われて捕まる首領の油断を指す。

火縄銃と槌矛で武装したラ・モルリエール部隊は、地下倉や納屋に山と積まれた密輸品を押収し、城を破壊して意気揚々と引き上げる。だが、一行が国境の村サン＝ジュニクス＝ダオスト（現アオスト）にさしかかった時だった。素足のまま荷車に乗せられ、脱走できないよう体を縄でぐるぐる巻きにされたマンドランを目の当たりにして、何が起こったかを悟った村人たちは、自分たちの英雄が捕まり、フランス兵に土地が汚されたことを憤り、「誘拐者たち」を攻撃したのである。この戦闘で少なからぬ死傷者を出した農民たちのさらなる憤怒を後目に、5月13日、ラ・モルリエールたちは無事マンドランとその3人の手下を従えてヴァランスに到着する。

マンドランの逮捕と農民虐殺、そしてまたぞろ繰り返されたフランス軍によるサヴォワ公国への領土侵犯。この知らせを受けて、サヴォワやドーフィネはもとより、遠くイタリア北西部ピエモンテ地方のトリノでも大騒ぎとなった。ここにはサルデーニャを支配していたサヴォワ公シャルル＝エマニュエル（カルロ＝エマヌエーレ）三世の宮廷があったからだ。これによつ

て、マンドラン逮捕劇は一気に外交問題へと発展した。

サヴォワ公はただちにパリ在住のサルデーニャ大使サルティラーネに命じて、領土侵犯を激しく抗議させた。この事態を何とか沈静化しようとして、フランス政府はとんでもない方便を弄する。ことの起こりは、国境地帯での戦利品の分配を巡る密売人同士の戦いにあり、敗れたマンドラン一味がフランス側に逃げ込んできたため、これを逮捕した、との嘘をついたのである。話の筋書きは、ラ・モルリエールが書いた。だが、この苦心の弥縫策は、サン＝ジュニクス村＝ダオスト村当局の調書やサヴォワ議会の調査によってほころびをみせる。

やがて、サヴォワ公の公式な外交文書を受けたフランス政府は、いよいよ実相を明らかにしなければならなくなる。こうしてルイ15世は、攻撃に加わった者たちの処罰を約束し、総徴税請負の傭兵隊長4人を投獄し、ラ・モルニエールも国外追放処分にした⁽¹⁰⁾。しかし、これで一件が落着いたわけではなかった。トリノの宮廷が、原状回復を名目に、マンドランとその3人の手下の返還を要求してきたのである。外交交渉は遅滞した。その間に、ヴァランス法廷での予審は急ぎ足で行われた。

特別ごしらえの脱走困難な地下牢に閉じこめられたマンドランへの尋問は、連日2回、4時間ずつ行われ、一切の反論は無視された。すぐに召喚できないとの理由で、証人喚問も行われなかった。マンドランを一刻も早く処刑する。それが焦眉の急だった。当然裁判は形式だけのものとなった。罪状を全面的に否認し続けたにもかかわらず、最終的に出された判決は、5月26日にマンドランをまず拷問にかけ、これまで犯した殺害事件の共犯者を白状させた後、車刑に処す、というものだった。

最期の日が近づくと、無信心だったマンドランではあったが、さすがに死後の不安に駆られたためか、サン＝ジュニクス＝ダオストの親しい助祭を呼んでくれるよう、裁判官に求める。

だが、処刑に間に合わないとして拒否されてしまう。みかねた慈善活動家の貴婦人たちが紹介してくれた、イタリア人のイエズス会士ガスパルニを聴罪司祭として受け入れ、5月24日と25日に告白をし、遺書を作成して託す。サヴォワに遺し、サン＝セヴランとショーモンの侯爵たちに預けてあるかなりの財産のすべては、正当な受贈者である妹のマリアンヌに。それが遺書の内容だった。フランスにある財産は、国王の名のもとにすべて没収された。

マンドランの処刑

1755年5月26日夕刻、マンドランは前例がないほどの警戒のもと、素足に下着、縛られた手に蠟燭の松明、首に縄といった姿で獄舎から、当時観閲式に使われていた処刑場のクレルク広場に引き出される。背中に背負った板には、大文字で以下の文言が記されていた。《密売人たちの首領、大逆罪人、殺人犯、賈金づくり、公序良俗の攪乱者》⁽¹¹⁾。広場にはすでに黒山の人だかりがしており、中には12スーで処刑見物用の踏み台を貸す機転の効く者すらいた。

裁判官が読み上げた判決文を甘受したマンドランは、ガスパルニ司祭に最後の告白を行い、自分を見捨てないよう懇願する。午後6時、市門が閉ざされると、それが合図に、マンドランに足を砕く拷問具「プロドカン」が取り付けられる。しかし、いくら責め立てても、彼の表情に苦悶の色はなく、手の震えもなかった。やがて車輪に座らされたマンドランは、コート＝サン＝タンドレ産のコート水（芳香性と甘さがある一種のリキュール）を2杯飲み干し、死刑執行人に手早く死なせてくれるよう言い置いて車輪に横たわる。

規則通り、死刑執行人が鉄の棒を8度振り下ろしてマンドランの手足や腰、胸を打ち砕くと、骨が飛び出し、肉がちぎれた。それでもマンドランは叫び声ひとつあげたりはしなかった。死刑執行人は無惨な姿のマンドランを、やはり規則に従ってそのまま8分放置してから、首を締

め、絶命させた。遺骸は絞首台の上で晒され、死刑判決文と調書は、マンドランが通過したすべての場所に掲示された。

それから1週間後、マンドラン処刑の報告がトリノの宮廷に届く。返還要求が反古にされたことを知ったサヴォワ公にとって、処刑は許し難い裏切り行為だった。フランス大使は、トリノとサルデーニャ王の全領地で、フランス（王室）への憎悪と騒動とが、これまで以上に激しくなっているとヴェルサイユに書き送っている。事実、サヴォワ公はヴェルサイユの大使を召還し、フランス大使には宮廷への出入りを差し止めた。再び窮地に陥ったフランスは、マンドランと一緒に逮捕し、まだ処刑していなかった彼の手下たちをサヴォワに戻さざるをえなくなる。加えて、フランス政府は、ラ・モルリエールの軽騎兵たちに蹂躪されたサン＝ジュネクス＝ダオストの住民たちにも、4万5000リーヴルの賠償金を払う。

こうして事件は一件落着した。だが、フランス政府にとって、それは新たな悩みの始まりにすぎなかった。マンドラン処刑後、その後継者とでもいうべき者たちが各地に出没するようになったからである。これについては他の機会に詳述したいが、取り急ぎここでは、マンドランの妹マリアンヌが、兄から受贈した遺産を使って新たな武装密売団を結成し、兄譲りの大胆さと何事にも動じない勇敢さで、1757年、一味の先頭に立って、オーヴェルニュ地方のグラス＝デュ大修道院を略奪したこと、さらに弟のクロードも兄の忠実な手下数人ともども、密輸品の密売活動を行うようになったこと、そして、彼らはルイ・マンドランの肖像に加えて、「Audacia（大胆さ）、fortiyudo（精神力・勇気・気力）、libertas（自由）」の標語を描いた旗印を掲げ持っていた、ということだけを指摘しておこう。

マンドラン賛歌

マンドランの名がいつ頃から広く知られるよ

うになったか定かではない。だが、文献の上では、1754年11月29日付きの《ラ・ガゼット・ド・オランダ》誌に、マンドラン（Mandrain）として初めて登場しているという⁽¹²⁾。彼が実際に行動を起こして、およそ1年半経った頃である。やがて義賊マンドランを讃える詩や歌謡、さらに版画などが枚挙に暇もないほど産み出される。とりわけそれが著しかったのは、マンドランの死の前後である⁽¹³⁾。

これらの書のうち、マンドランを賛美したものとして、たとえばサン＝テティエンヌの北20キロにある山村サンサン＝メダールの助祭レオナールが、マンドランの処刑された1755年に書いた2篇の詩がある。1篇はマンドランの生前ないし逮捕前、もう1篇は処刑後の作で、いずれも小教区簿冊に、教区民の洗礼や埋葬記録と混じって収載されているという⁽¹⁴⁾。以下はその試訳である。

「偉大なるマンドランを讃える歌」
勇敢なるマンドラン！
汝は立派に帳尻を合わせた。
勇敢なるマンドラン！
ワインと塩とタバコの課税役人すべての帳尻を。
彼らは貧しき者や金持ち、さらには貴族たちから盗みを働いて、
微塵たりと恥じてはいない。
勇敢なるマンドラン、
いかなる国が
汝のことを知らなかったか？
いかなる国も
汝を教訓とする人々を抱えているのだ。
学問もなく、知識もない汝は
フランス全土を走り回った。
冷静に町や村を、
至るところを走り回り、
モルリエールなど歯牙にもかけなかった。
汝の仲間たち汝自身は
桃源郷をつくるという光栄に浴した。

至るところを走り回りながら。

「マンドランの墓碑銘」

かつて見た力持ちのヘラクレスのように
大槌を手に世界を走り回り、
人類を荒廃させた一頭以上の飢えた怪物を
打ち据える。

こうして俺は徴税人たちが荒廃させた
フランス中を走り回る。

俺はこの連中を破滅させるために命を落とした。

もしも無垢な人々を破滅させたのなら、
連中同様、俺もまたもうひとつの報いを受けるはずだ。

さほど想像力に満ちている詩ではない。詩句自体もどちらかといえば陳腐な印象を拭えない。だが、ここにはすでに社会の悪＝徴税請負人やその傭兵たちを懲らしめ、社会を改革しようとする義賊＝英雄のイメージが克明にみとれる。おそらくそれは、日々一般民衆と接していた下級聖職者（助祭）として、いや、時代のささやかな証人として、マンドランを英雄視する当時の民衆的イマジネールをそのままなぞったものに相違ない。

同様にマンドランを義賊＝英雄にまつりあげたものとしては、同年ジュネーヴで刊行され、翌1756年には7版を数えるまでになった『密輸・密売団の司令官マンドランの政治的遺言』⁽¹⁵⁾がある。副題に「マンドラン自身が獄中で書き記した」とあるが、実際の著者は、雑文家で密偵の仕事も引き受けていたというアンジュ・グダー。70頁たらずのこの書の説明は、千葉治夫氏の『義賊マンドラン』に譲るが、その目的は、マンドランという格好の「義賊」の口を借りて、総徴税請負制を批判するところにあった。つまり、1755年に発表された作者不詳の詩『マドリナド——マンドラン信奉者たちに向けた英雄詩』⁽¹⁶⁾と同様に、そこではマンドランが「奴隷的民衆」や「不幸な商人たち」を、

総徴税請負人たちの専横から解放する者とされているのだ。

もとより、こうした著作はあくまでも識字階級に向けられたものであり、どこまで社会の底辺で生きる人々に読まれたものかは不明である。しかし、ごく一般的にいて、民衆は宗教改革時のローマ教会弾劾ビラの例を引くまでもなく、識字者を通してそのメッセージに接することができた。接して、すでに何ほどか流布していた伝聞や噂を再確認し、さらにそれを広めていった。そんな民衆にとって、マンドランの実像はもはやさほど問題ではなかった。自分たちの不平不満や想像力と密接に重なり合う彼の虚像こそが、じつは重要だったのだ。

これについて、近代史家のエドモン・エモナンは次のようながった見方を披瀝している。「史実に還元していえば、この（マンドラン）のアヴァンチュールは単純そのものである。金銭的破綻と不運のために絶望のどん底に突き落とされたひとりの勇敢な農民が、他の農民たちが海賊や賈金づくりになったように、密輸品の密売人になった。持ち前の活力と勇気と知力とによって信じがたいほどの偉業を成し遂げた彼の目的は、勞せずして蓄財するところのみであった。たしかに仲間たちとともに地方全体を恐怖に陥れたが、それもたかだか数ヶ月たらずのことであり、最後は車刑によって殉教している。それだけの話である。ところが、民衆の想像力は彼を自分たちの好みに沿って変身させた。こうして彼は、いかなる危険も顧みず、あらゆる策略を駆使する英雄にまつりあげられたのだ」⁽¹⁷⁾。

マンドラン事件の第2幕はまさにここから始まる。その幕を開ける前に、ここで当時の辞典から「英雄」の定義を確認しておこう。

18世紀最大のフランス語辞典として定評のあるリシュレの『古・現代フランス語辞典』（1759年版）は、英雄（héros）をこう定義している⁽¹⁸⁾。

- ①その偉業によって神に列せられる存在。
- ②希少な価値ないし才能・功績を有する人物。

③模範として提唱される値打ちのある人物。

④叙事詩や演劇、小説に登場する主役。

⑤人からつねに賞賛される人物。

⑥良質な著作家。

辞書の定義は、たえず転義する民衆語彙の含意を必ずしも網羅しているわけではない。そのことを留保していえば、おそらく英雄としてのマンドラン・イメージは、カルトウーシュのそれがせいぜい②だけであるのに対し、②と（ないし）③にかかわる。つまり、字義からすれば、マンドランは時代の英雄像の枠内に位置づけられると考えられるのだ。少なくともそこから大きく逸脱するものではなかった。しかも彼の英雄的要素は、支配のメカニズムに抗することで増幅していった。塩やタバコの専売システムや徴税システムに対する怨嗟の表象として、民衆自身が拡大させていったともいえる。だからこそ、当時の支配階級は彼を、いや、彼を英雄と見立てる民衆のイマジネールを恐れた。

英雄の脱神話化——イメージの再生産

総徴税請負人やその傭兵たち、というより、フランス王政を支える徴税請負人制全体にとって、処刑後、日増しに神話化されていく「義賊」マンドラン像を脱神話化することは、まさに緊急の課題となった。そこで彼らが思いついたのは、ネガティブ・キャンペーンを張ることだった。こうして登場するのが、1755年にアムステルダムの書肆から刊行された、司祭レグレによるマンドランの物語である。題して『ルイ・マンドランの誕生から死までの歴史』。この書の狙いは、「彼の残虐さと盗賊行為、および処刑」という副題からも分かるように、マンドランを悪の代名詞として定立させるところにあった。それは、次のような一文から始まる。⁽¹⁹⁾

盗賊たちが歴史の中にその場を見つけることはありえない。（…）盗賊たちの首領は、だれもがサリュスティウス（前86—前35頃。ローマの歴史家・政治家。不道德の廉で元老

院を追放されたのち、カエサルのもとで復帰し、ヌミディアを統治する。カエサルの死後、政界を離れ、『カティリナの陰謀』などを著す)の掣みに倣えば名誉に与れると思っているかもしれない。だが、いずれこうむることになる処刑によって、彼らの罪は妨害されるはずである。カルトゥーシュは車輪の上で命を絶たれ、マンドランもまた同じ運命を辿った。盗賊や殺人犯にしても、放火魔にしても、所詮はそうした最期を迎える。罪人がその罪を罰せられずにいることは決してないのだ。

マンドランは幾度となく逮捕されて脱獄し、その都度新たな一味を立ち上げる。そんな彼の仲間になろうとする者は、秘密結社の加入式よろしく、魔術的な入会儀礼に臨んで宣誓を行い、徴税請負人や取締り隊に対する彼の呪詛を拝聴する……。マンドランの生涯を一見丹念になぞっているかのような印象を与えながら、夥しい誇張や中傷、揶揄を散りばめる。こうしてマンドランのイメージを、義賊や英雄とはまるで無縁な極悪人に仕立て上げる。すなわち、「優しさと勇気とに満ちあふれた存在＝虚像」、「恐ろしい怪物・野蛮人・嫌悪と恐怖の対象＝実像」という対比によって、マンドランの英雄神話を解体し、さらにそうした神話を信じる民衆自身が王政への反逆者となり、結果的にマンドランの「犠牲者」になる、ということを示す。レグレの意図は、明らかにそこにあった。

あるいはそのあざとさゆえか、それともマンドランの名声ゆえか、この書は行商本としてフランス各地に普及し、1755年にシャンペリの書肆ゴランから新版が出されてから、パリやアヴィニョンなどで版を重ね、イタリア語版(1755・85・79年)やドイツ語版(1755・58年)も出されている。

興味深いことに、1755年にはまた、マンドランの生地サン＝ジョワールで、一説にレグレの手になるという中傷書、『マンドリナドもしくはマンドランの生涯に関する奇妙にして真正かつ

刮目すべき物語』が、やはり行商人が売りさばく安価な青本の形態で刊行されている。おそらく出版地は偽りと思われるが、そこではまずマンドランの父親は白酒のみ、母親は敬虔なキリスト教徒として描かれている。一方、マンドラン本人については、醜く全身毛だらけで生まれ、子供時代は盗みに明け暮れ、司祭を憎み、長じては賤金づくりの傍らあくどい博労稼業に身を置き、さらに徴税請負人の傭兵や国王軍兵士、遊び仲間、身重の女性、町や村の住民、貴族たちを殺害した重罪人だと記されている⁽²⁰⁾。

人類の不幸のために生まれ、正直な者たちすべての憎悪が向けられた呪わしい怪物。この書に次々と現れる罵詈雑言(一部)を繋げばこうなる。より正鵠を期していえば、そこでは、たとえばマンドランの勇気が「極悪非道」、強い精神力が「無信心」とに、つまり人口に膾炙した彼の肯定的・神話的イメージが、それを打ち砕こうとする体制側の否定的・脱神話的イメージと対句的に結びつけられているのだ。一方的にマンドラン・イメージを葬り去るのではなく、民衆がそれまで抱き続けてきたマンドラン神話を幻想と断じ、その言葉の意味を剥ぎ取り、あるいは新たな言葉を正統なものとして付加することで、「官製」の神話を立ち上げる。神話をもって神話を封じる神話の篡奪。そこには、今日まで幾度となく繰り返されてきた民衆の神話と体制的神話の相剋が、ものの見事に立ち現れているともいえる。

こうしてマンドラン神話は、史実性と虚構性を織り交ぜた物語や詩や戯曲などを媒体としながら、彼を義賊＝英雄視する民衆的イマジネールと断罪する体制的イマジネールとが、激しくせめぎ合う場として(再)構築されていく。やがてこの2通りのイマジネールは、いずれも決定的な凱歌をおさめることなく、社会のイマジネールとして互いに混ざり合った形で持続され、夥しい数の「マンドラン文学」をさらに世に送ることになる。ここで何よりも興味深いのは、そうしたせめぎ合いが、彼が処刑された1755年

に一齐に展開した、ということである。むしろそれは、すでに指摘しておいたように、彼の処刑を機に一気に拡大した義賊＝英雄神話に対する、総徴税請負人たちの危機感に起因しているはずだが、では、冒頭に紹介した青本叢書の『対話』とは、この文脈においてどのように読まれるべきなのだろうか。

おわりに——『カルトウーシュとマンドランの対話』の象徴的意味

試みに、カルトウーシュとマンドランについて以下のような対照表を作ってみよう（カルトウーシュについては、『人間科学研究』Vol.

17, t. 1, 2004所収の拙論「アンチ・ヒーローの創出もしくは民衆的想像力」参照）。

この対照表から分かるように、マンドランとカルトウーシュたちの実質的な「犯罪」期間は、前者が2年、後者が3年ときわめて短い。その短さにもかかわらず、両者は英雄視されるようになった。ただ、「犯罪」の規模という点でいえば、マンドランははるかにカルトウーシュを凌いでいる。その目的もまた、マンドランの場合は、単なる泥棒の肥大化しただけのカルトウーシュのそれと著しく異なっている。にもかかわらず、なぜこの『対話』の作者は、両者を拮抗する負性の英雄として対置させたのか。今と

カルトウーシュ／マンドラン対照表

	カルトウーシュ	マンドラン
父親	樽職人	小間物商
出自	徒弟（非職字者）	小間物商・家畜業（職字者）
生没年	1695－1721年	1723－1755年
一味の活動期間	1718－1721年	1753－1755年
犯罪への契機	家出・ロマたちとの出会い	戦争・破産
犯罪の動機	金目当て	私憤
関連時代背景	ロー・システムによるバブル経済	専売・総徴税請負制度
主たる活動地	パリおよび市外区	辺境（サヴォワ・ドーフィネ）
活動範囲	限定的	広域的
手下数（うち、兄弟）	366人＋（弟2人）	約800人＋ ⁽²¹⁾ （弟2人・妹1人）
一味の犯罪内容	窃盗・強盗・殺傷	密輸・密売・殺傷・贋金づくり
主たる被害者	一般人・富裕者・貴族・夜警	徴税請負人・傭兵・公売人
被害者数（殺害）	不明（10数人）	約30人
共犯者	居酒屋店主・密偵・衛兵など	
協力内容	盗品の故買・横流し・転売など	
主たる隠れ家	居酒屋・オーベルジュ	山中・城塞
逮捕のきっかけ	仲間の裏切り	密告
最期	車刑（享年26歳）	車刑（享年30歳）
終焉地	パリ	ヴァランス
一味の裁判判決	車刑・絞首刑・追放・罰金・財産没収（欠席裁判を含む）	車刑・絞首刑・ガレー船・罰金・財産没収（欠席裁判を含む）
イメージの普及	青本・詩歌・版画・芝居など	青本・詩歌・版画・芝居など
芝居上演（1755年）	パリ	アムステルダム、ロンドンほか
表記（後代）	「高名なるカルトウーシュ」	「義賊」・「高名なるマンドラン」

なつては、もとよりその真意は不明である。前述したように、先行する英雄カルトゥーシュと対置させることによって、遅れてきたマンドランの偉大さを顕在化させようとしたとも、あるいはこれら民衆的英雄を、レグレの罅みに倣って弾劾するためとも読みとれる。

だが、あえて両者を裁き断罪する役回りとしてプルトンを登場させた作為の裏側に迫れば、冥界の王を頂点（＝国家）とし、さらにカルトゥーシュを、すぐれてシャルラタンのイギリス出身の財政家であるジョン・ローの、いわゆる「ロー・システム」に狂喜乱舞していたパリに、マンドランを、総徴税請負制度と専売制に喘いでいた地方にそれぞれ見立てる、三角形の異時同図的な政治的配置がみえてくる。そして、この両者を底辺でつなぐのがほかならぬ民衆のいつに変わらぬ英雄待望であり、唐突に登場する新流行のカブリオレとは、やがて来る革命の時代を予告するものとも思えるのだ。

註（イタリック体は論文）

1. Dialogue entre Cartouche et Mandrin, où l'on voit Proserpine se promener en cabriolet dans les Enfers, A la Barre, Chez La Roue, MDCCLV (Bib. Mazarine) および Troyes, Imp. de J. Garnier, 1755.
2. 総徴税請負人とは、アンシャン・レジーム期に塩税や関税、消費税といった間接税の徴収を通常6年間の契約で一括して請け負った者たちを指す。彼らの徴税活動は国家の財政維持に大きく寄与し、たとえば1763年の国家収入約3億2000万リーヴルのうち、一括徴税請負部分（塩税・消費税・タバコ専売収益など）は、その約3分の1にあたる1億2400万リーヴルにものぼったという（千葉治夫『義賊マンドラン』、平凡社、1987年、51頁）。1726年には総徴税請負会社の本部がパリに設立され、平均して常時40人前後が活動していたが、帯剣を許された彼らの役目には、徴税請負業務に加えて、傭兵（アンプロワイエ）と呼ば

れる武装取締り隊員を使つての、密輸・密売や脱税の管理・取締り・摘発も含まれていた。ただ、本文にあるように、彼らの強引かつ高慢な行動はしばしば民衆の恨みを買った。事実、1755年5月4日、グルノーブル高等法院主席検事であるモワデューは、財務総監に次のような書簡を送っている。「サン＝ジョワールとローモン村で、数日前、徴税請負人の傭兵たちが（マンドランの故郷である）サン＝ジョワールの村民2人とローモンの村民1人を射殺しました。しかし、これは密売や騒乱の問題ではありません。傭兵たちを侮辱したためでもありません。すでに小職の元にはかれら傭兵に対する不平不満がかなり舞い込んでおります。彼らがさまざまな村で行った行き過ぎに関する報告書も送られてきております」（Frantz FUNCK-BRENTANO, *Les Brigands*, Hachette, Paris, 1924, p. 223）。

3. これについては、杉本淑彦『ナポレオン伝説とパリ』（山川出版社、2002年）を参照されたい。
4. 車刑とは、2本の梁を車輪の上でX十字の形に組み合わせ（「聖アンドレ十字架」）、処刑執行人がそれに仰向けに寝かせた囚人の全身の骨をうち砕いて死に至らしめる処刑法。カルトゥーシュやマンドランの場合がそうであつたように、しばしば死刑判決の際に、絞首によって受刑者の苦痛を軽減するための特別な恩赦、つまり「レタンテム」が言い渡されることもあつた。この車刑はフランク王国最初の王朝であるメロヴィング朝（5－8世紀中葉）で考案され、ドイツでは、1532年にカール五世が神聖ローマ帝国に正式にこの刑罰を導入して以来、頻繁に行われるようになった。そしてその2年後に、文芸の擁護者としても知られるフランソワ一世（在位1515-47）がフランスに導入している。
5. ルイ十四世下のフランスがプファルツ継承戦争さなかの1688年11月、王令によって前線部隊を補佐する後衛ないし兵員補充を目的と

して定められた非傭兵予備軍。これにより、各小教区（群）は20歳から40歳までの壮健な独身男子50人を選び、2年間の兵役につかさなければならなくなった。1691年、この小教区による選抜方式は籤による抽選制にとって代われ、1697年に一時廃止されたが、スペイン継承戦争が勃発した1701年に復活し、18万5000もの民兵が徴募され、一部が正規軍に編入されて前線に送られた。だが、小教区はしばしば金銭で教区民の兵役義務を免れる方を選んだ。こうして1708年、国家財政の逼迫に伴って、民兵義務は金納におきかえられるようになった。

1726年2月、新たな王令が公布される。平時にもかかわらず6万人の民兵を徴募することを目的としたそれは、より厳しい内容のもので、徴兵対象は16歳から40歳までの未婚男子ないし寡夫へと広げられ、兵役期間も6年となった。だが、そこにはいろいろ例外措置が設けられており、少なくとも1743年までは、富農ないし大農地経営者自身やその息子たち、家畜100頭以上を有する羊・牛飼、30リーヴル以上の人頭税を納めている商人や手工業者、法曹人や書記、公証人、内・外科医、役人、調剤師といった特権階級、さらに4000リーヴル以上の官職保有者も対象外だった。これに対し、各地の都市、とくにパリの貧しい住民たちは、「農民ほど重要ではない」として、苛酷な「^{テューグジュ・オ・ソール}運命の抽選」を課せられた。スー事件はまさにこの免除措置を発端とする。

6. ル・ロワ・ラデュリ『南仏ロマンの謝肉祭』（拙訳、新評論、2002年）所収の「まえがき」参照。

7. FUNCK-BRENTANO, op. cit., p. 233.

8. Ibid., pp. 240-241.

9. Voltaire : Correspondance, t. V, éd. de Theodore BESTERMAN, Gallimard, Paris, p. 339.

10. ラ・モルリエールはのちに軍務に復帰して、1792年には85歳という高齢にもかかわらず、

ライン部隊の指揮官代理に任ぜられている。翌年、引退してパリ西郊のルーヴシエンヌで余生を送ることになるが、本来なら1万リーヴルを受給できる年金額がこれら一連の事件のため、3000リーヴルに減額されたという (Marie-Hélène BOURQUIN : *Le procès de Mandrin et la contrebande au XVIII^e siècle*, in *Acte de la contrebande au XVIII^e siècle*, P.U.F., Paris, 1969, p. 17)。

11. Archives Nationales AD+90, AD Drôme (Valence), B 1304, n° 287.

12. Marie-Hélène BOURQUIN : *Le procès de Mandrin et la contrebande au XVIII^e siècle*, in *Aspects de la contrebande au XVIII^e siècle*, P.U.F., Paris, 1969, p. 7.

13. 1755年には、本稿で取り上げるもののほかに、以下のようなマンドラン物が刊行されている。

①『ルイ・マンドランを車刑に処した至高の判決』(Jugement souverain, qui a condamné à la roue Louis Mandrin)

②『フランスの密売団首領ルイ・マンドラン略伝』(Terrier de CLÉRON: Abrégé de la vie de Louis Mandrin, chef des contrebandiers en France, avec le journal de ses excursions et le récit de sa prise et de l'exécution de son jugement à Valence en Dauphiné) : 著者テリエ・ド・クレロン (1697-1765) はドール会計法院院長。なお、著者を後述の司祭レグレとする説もある。

③『塩の密輸・密売団隊長ルイ・マンドラン氏への弔辞』(Oraison funèbre de Messire Louis Mandrin, colonel général des faux-sauniers et contrebandiers de France, Lyon) : 一部の版に『絞首刑にされた者たちの歌』(Sur l'air des pendus) を併載。

④『マンドリナド』(La Mandrinade, poème. En quatre chants en vers

- burlesques) : 4 篇の滑稽・風刺詩からなる
- ⑤『レイ・マンドランの生涯詳述』(Précis de la vie de Louis Mandrin...,)
- ⑥『マンドランの嘆き節』(Complainte de Mandrin)
- ⑦スタニスラス・デュプレシス『逮捕されたマンドラン』(Stanislas DUPLESSIS : Mandrin pris, Amsterdam) : 1 幕物の喜劇
- ⑧R・ファン・ラアル『マンドランないし復讐の効果』(Mandrin ou les effets de la vengeance, R. Van Laal, La Haye) : 3 幕物の喜劇
- * 上記③、④、⑤は②に所載
- なお、ハンス＝ユルゲン・ルーゼブリンクによれば、マンドラン存命中の1754年から処刑年の55年まで、マンドラン関連記事が7種の雑誌に70点収載され、1754年から89年にかけては、物語本が13点、非物語本が14点刊行されているという
- (Hans-Jürgen LUSEBRINK : *Images et représentations sociales de la criminalité au XVIIIe siècle--l'exemple de Mandrin*, in *Revue d'Histoire moderne et contemporaine*, t. XXVI, juillet-septembre, 1979, pp. 339-340).
14. D'après Jean-Jacques VERNIER : Mandrin et les Mandrinistes. Notes et documents, Annecy, Aloy, 1899, pp. 15 sq.
 15. Testament politique de Louis Mandrin, généralisme des troupes des contrebandiers : écrit par lui-même dans sa prison.
 16. La Madrinade, en vers hiroique, adressée aux partisans de Mandrin, dédiée à Mme la C. de R, in Adolph ROCHAS : *Biographie du Dauphiné*, contenant l'histoire des hommes nés dans cette province qui se sont fait de leurs portraits, t. II, Charavay, Paris, 1858, pp. 106-108.
 17. Edmond ÉSMONIN : *Etudes sur la France des XVII^e et XVIII^e siècles*, P.U.F., Paris, 1964, p. 428.
 18. Pierre RICHELET : *Dictionnaire de la langue françoise, ancienne et moderne*, Nouvelle édition, t. II, Les Frères Duplain, Lyon, p. 363. この「英雄」の定義を引くまでもなく、マンドランを、カルトゥーシュ同様、アンチ・ヒーローと呼ぶことには若干の疑問が残る。いわゆるアンチ・ヒーローには、対概念としてつねに拮抗する英雄が必要だからである。だが、紙幅の都合もあり、その詳細な検討は他日を期さなければならない。
 19. L'Abbé REGREY : *L'histoire de Louis Mandrin, depuis sa naissance jusqu'à sa mort. Avec un détail de ses cruautés, de ses brigandages, et de son supplice*, E. Van Haarevelt, Amsterdam, 1755, p.1 (Bibliothèque Nationale, LN27-13342).
 20. *La Mandrinade, ou l'histoire curieuse, véritable et remarquable de la vie de Louis Mandrin*, Saint-Geoirs, 1755, pp. 10 sq.
 21. BOURQUIN, op. cit., p. 4. ヴォルテールは前述した私信でマンドラン党の数を6000あまりとしているが、むろんこれは彼が耳にした当時の民衆の多分に期待が折り込められた数値である。なお、ブルカンによれば、これら800余の手下のうち、実際にフランス領内で活動したのは400たらずだったという。

[2004年5月26日受理]

Deconstruction of a Hero Myth, or Kulturkampf in 1755
—On the "Dialogue entre Cartouche and Mandrin"—

Fumiya Kuramochi*

Abstract

This paper studies the anti-hero myth of Louis Mandrin (1725–55), noted among contrabandists and a formidable antagonist of the "Fermiers généraux" in modern France, who was executed on the wheel in 1755 in Valence, southern France. Created by the popular imagination, similarly to the case of the famous robber Cartouche who came to the same end in Paris in 1721, this popular myth was widely distributed by means of a range of publications, chants and images during 1755–1756. It was challenged, however, with various literary counterattacks of the establishment which aimed to create another myth in order to devalue the popularity of the anti-hero and portray him as a cruel robber. Thus began a battle between the popular culture and the elite culture over the status of the anti-hero Mandrin.

*School of Human Sciences, Graduate School of Human Sciences, Waseda University